

# 多和田真淳調査収集の考古資料 (IV)

★ 多和田真淳・知念 勇 ★★

## 1. 百名第2貝塚

発見 1955年 多和田真淳

玉城村百名に所在する沖縄編年前期の貝塚。標高50米の琉球石灰岩の崖下に遺物包含層が形成されている。包含層は崖と巨大な岩塊とのあいだにできた隙間に、幅3~4米、厚さ4米堆積している、その断面や下方斜面に多量の貝殻や土器などがみられる。その崖上にはわずかに、土器片の散布がみられるが、包含層は形成されない。1980年(昭和55年)に、沖縄県教育庁文化課により、本遺跡の試掘調査が実施され、報告された。<sup>注1</sup>それによると、出土遺物は沖縄編年の前期に限定されている。

この調査によって伊波・荻堂式土器、両刃の磨製石斧、貝や骨制の装身具等が出土している。土器には器体上半部に瘤状の貼付外耳をもつものもある。奄美系の面縄前庭式土器も得られている。

貝製品にはサメ歯状垂飾や精巧に作られたペンダント類・腕輪などがある。貝は海産種を主体に92種(陸産のマイマイ類が多い)出土している。

## 土 器

数拾片の細片が採集されているが、有文等の特徴があるものは、第1図1~7の7個である。

第1図1は、口縁部上端に叉状具による平行連点文が一条と、口唇部に一列の連点文が施されている。表裏面とも灰白色を呈するが芯部は黒褐色となる。外面には器面調整時の擦痕が残っている。焼成は弱くもろい、胎土には石英粒と砂粒を多量に含む。器厚6粋。

同図2は、波状口縁で外反する深鉢形土器である。波頂部から胴部と口縁に平行して幅6~8粋の帶状貼附文が施されている。この貼附文上と口唇部には細い叉状具による2条連点文が施されている。器色は内外とも赤褐色で芯部は暗黒色となる。胎土には石英粒と砂粒が混入する。器厚9粋。器形等の特徴から伊波式とみられる。

同図3は、口経部の破片、経部下端とみられるところに単範工具による点刻文が2列とその上に三本の斜沈線文が施される。外面は褐色となるが芯部と外面は黒色で、内面には横位の調整痕が施される。胎土には石英粒と砂粒が混入する。器厚は7粋、器形等の特徴からみると、荻堂式の特徴がみとめられる。

同図4は、胴部の有文破片、経部には叉状工具によるとみられる2条連点押引文が2列施され、その下端には鋸歯状の沈線文が一列施されている。荻堂式の深鉢形土器である。外面は黒色で内面は赤褐色、芯部は黒色である。胎土には多量の石英粒と砂粒が混入する。

同図5は、口縁部が花鉢状をなすカヤウチバンタ式の口縁部片である。内外面ともよく器面調整が行届いている。器色は外面は褐色で外面と芯部は暗褐色である。胎土には石灰質の細片が多量に混入している。

同図6は、経部から胴部にかけてのいわゆる奄美系の土器である。現存部の下方が器厚を減じ段

(★たわだ しんじゅん 那覇市史編集委員)  
(★★ちねん いさむ 県立博物館学芸員)

差を生ずることと、その上部に文様を有することから、嘉徳式特有の口縁部である。尖端が鋭利な単範工具によって押引された三本の横位文が施されている。

## 石 器

第6図1は、粘板岩製のスレート状の刀物で、図の上端と右端は片刃状の刃となっている。下端部は欠失する。最大幅5.3釐、厚さ2.5耗である。

## 2. 渡嘉比久貝塚

渡嘉敷と阿波連のほぼ中間にある海岸砂丘に立地する。同砂丘は三方を山にかこまれ、西側が東シナ海に面している。遺跡の立地する海岸は、現在渡嘉比久ビーチとして夏はにぎわいをみせている。1966年（昭和41年）沖縄学生文化協会によって、表面調査がなされ報告された。<sup>注2</sup>それによると、土器（壺形、甕形、鉢形）貝錘、球状石器などが発見されている。くびれ平底、尖底およびコブ状突起を有する鉢形土器等が出土する。これによって、本遺跡は沖縄編年後期初頭からグスク時代への移行期に位置づけられる。

## 土 器

第2図1は、口縁部にコブ状の把手が貼付された鉢形土器である。口径は測定不能である。内外面とも褐色をなし、範削りの痕がナデ消されているが内底部附近に範削りの痕が残されている。口唇部が尖り、胴部から底部にかけて、厚くなっている。胴部中央部での器厚は約1釐である。焼成は良く硬質の土器で、胎土にはサンゴ粒が混入する。器高約8.3釐である。

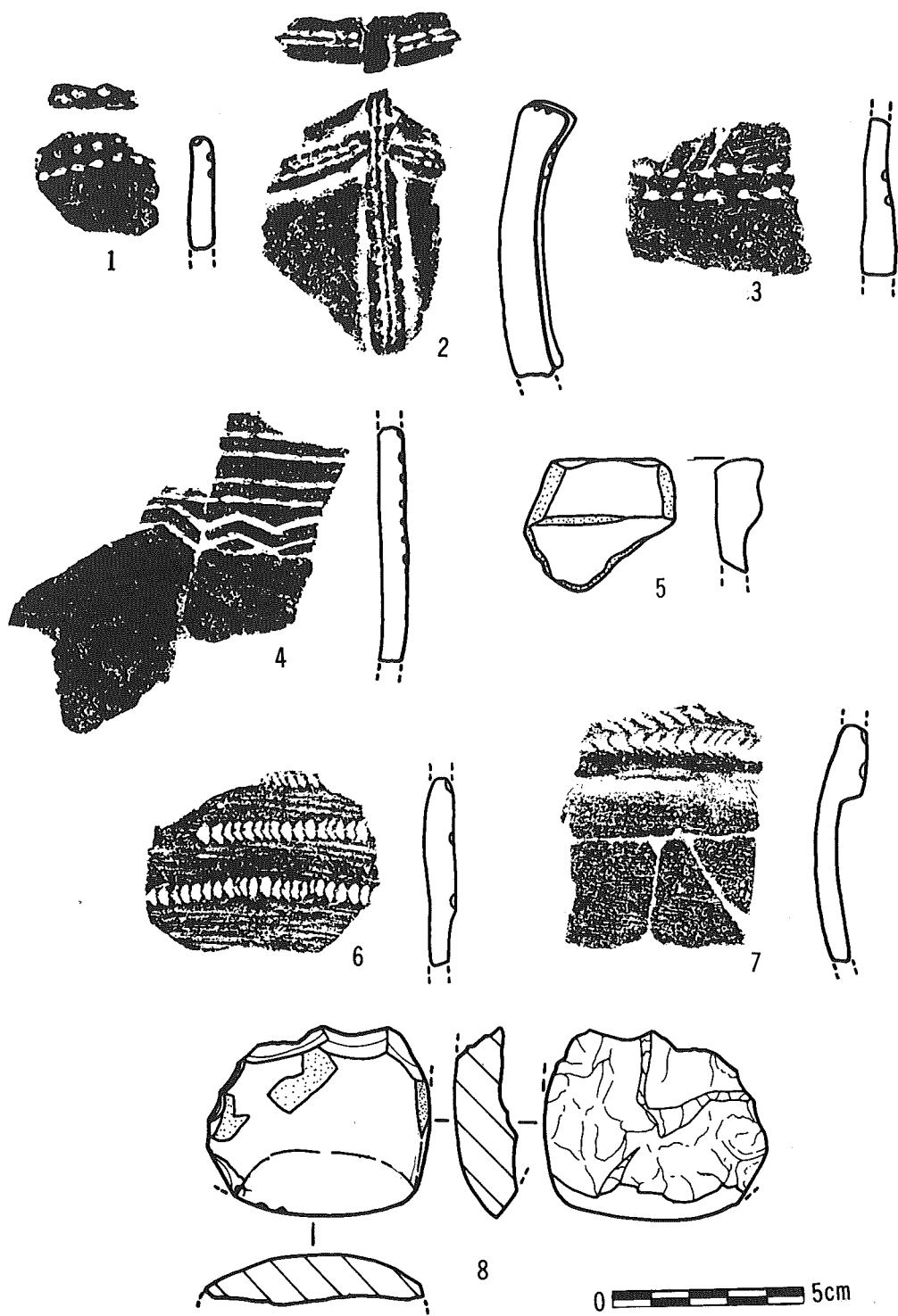
第2図2は、口縁部が外反する甕形の無文土器である。縁部には成形時の指頭圧痕が残っている。焼成よく、硬質で内外面は黄褐色をなす。胎土には砂粒が多量含まれている。口唇部は円くなる。器厚4耗と薄手の土器である。

同図3は、口唇部が尖り、口縁部がわずかに外反する甕形の土器とみられる。器色は全面黄褐色で、硬質の土器、胎土には石英粒と砂粒が混入する。器厚7耗。

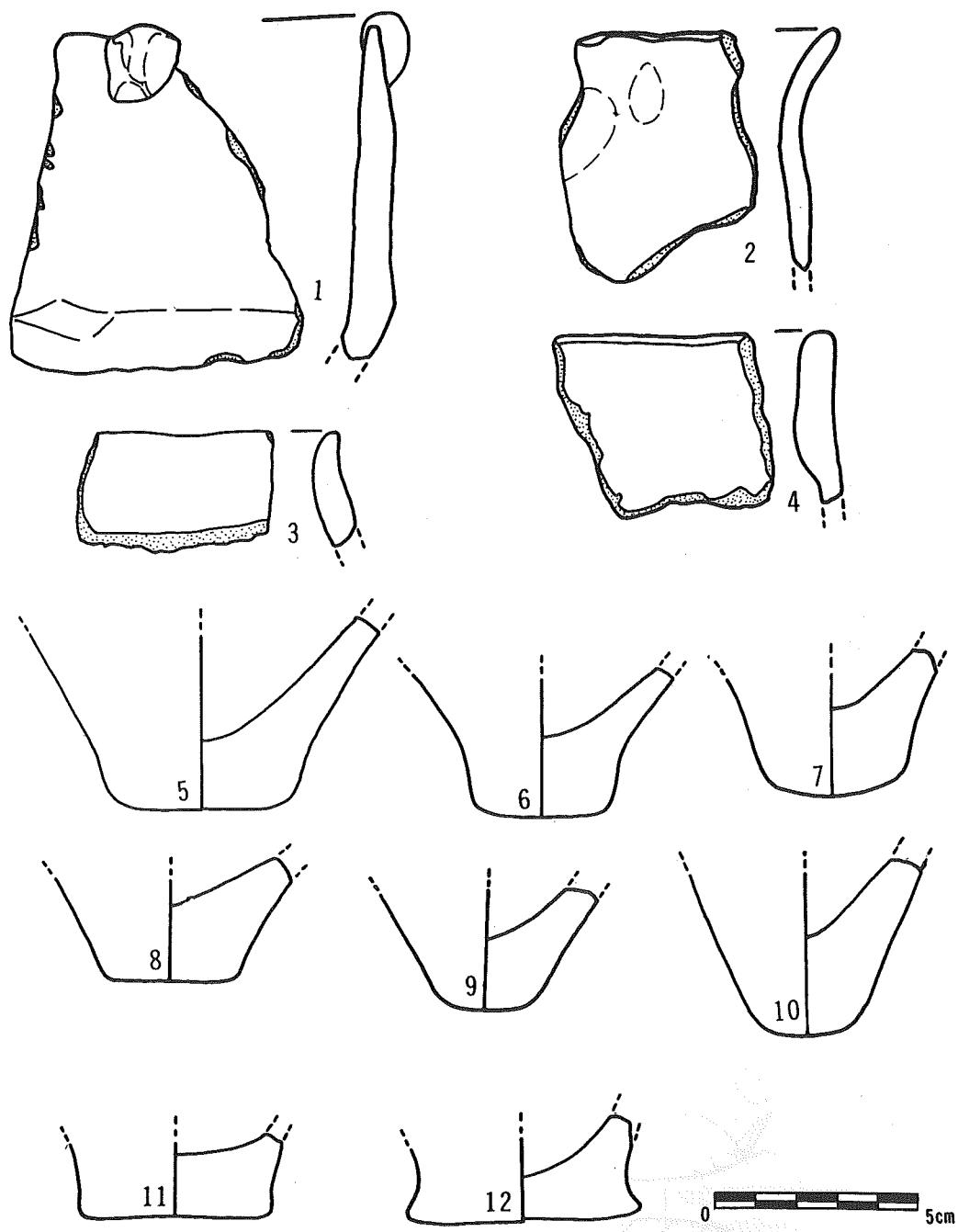
同図4は、平口縁をなし、口縁部が直交する。外面は黄褐色で表面がよく調整されている。内面は赤褐色をなし、口縁部は内側に折り返されており、図にみるように内部が厚く有段状をなす。焼成は前述図1～3に比して悪くもろい。器厚7耗で胎土には石英粒と砂粒を含んでいる。無文であるが後期では古いタイプの土器とみられる。

同図5は、底部から胴部へかけてふくらみをもつ甕形土器の底径4.3釐の平底土器である。現存部でみると、輪積み痕から欠失しており、図にみる部分を作り出してから積み上げていったことが考えられる。焼成良好な硬質の土器である。外面は器面調整痕がナデ消されているが内面には条痕が明瞭に残されている。全面的に灰白色となる。胎土には砂粒と赤褐色をした粒が混入する。継目の器厚8耗、底部厚1.7釐。

同図6は、底部から胴部への移行部分がくびれ状になり、胴部が大きく張るタイプの土器である。焼成は良く、かなり硬質である。底径が3.4釐と小さい。外面は灰白色で内面は赤褐色。胎土には石灰片が混入する。器厚6耗、内外面とも調整痕がナデ消されている。



第1図 百名貝塚



第2図 渡嘉比久貝塚

同図7は、底部から胴部への立上りが急な円底的平底土器である。焼成は良く硬質で、器色は外側が褐色で内面は黒色となる。胎土には石英粒と砂粒及び赤褐色の粒が混入する。底径2.3厘、底部厚2.2厘と厚底である。

同図8は、底部から胴部にかけて、急傾斜をなすため胴部にふくらみをもつタイプの土器である。内底部は外側へ急傾斜するため内底径はせまくなっている。硬質で、内外面とも赤褐色となるが芯部は灰色または黒色となる。底径3.3厘、底部厚1.8厘で比較的厚底である。

同図9は、円底的平底で、底部から胴部への立上りが急である。硬質で内外面は灰白色または褐色となっている。胎土には砂粒と赤褐色粒が混入する。底径2厘、底部厚1.8厘である。

同図10は、円底的平底で、底径が2.1厘と小さい。底部から胴部への立上りは急である。これまでの底部中最も硬質である。外面は赤褐色、内面は黒色となる。胎土には、砂粒が混入し赤褐色の粒子も少量混入する。底部厚2.5厘と厚底である。

同図11は、いわゆるくびれ平底の土器である。内外面とも赤褐色の硬質な土器である。胎土には砂粒が含まれるが混入物はきわめて少くなく精選された粘土が使用されている。底径4.8厘、底部厚1.5厘である。

同図12は、くびれ平底で、図11に比してくびれが顕著である。外底部は多小上げ底状となっている。内外とも褐色でよく焼き締められている。胎土には石英粒と砂粒が混入する底径5.8厘、底部厚1厘である。

## 石 器

石器は、第3図の方形のクボミ石である。敲打痕は側面が三面と上下両面の5面にみとめられる。側面では、図の下部だけは研磨が丁寧で打欠痕もみあたらない。長軸の最大長7.8厘、短軸の最大は6.8厘である。重量530g、石質角セン玢岩である。

## 3. 大浜貝塚

発見 1955年 多和田真淳

大浜部落の南端から東シナ海へ注ぐ大小掘川があり、貝塚は川の北側に面した琉球石灰岩丘陵の崖下に立地する。現在は遺物の採集も困難な状態にあり、遺跡の中心地は確定できない。多和田の記録では、後期下半（具志頭城系）となっている。<sup>注3</sup>

## 土 器

第3図2は、口縁部が破状をなす小波片のものである。口縁部に成形時のものとみられる指頭痕が残っている。焼成よく硬質の土器で、外面は黒色で内面は赤褐色となる。胎土には砂粒と赤褐色粒が混入する。器厚は4耗と薄手である。

同図3は、口唇が円くなり、口縁部が外反する土器である。この土器は芯部の一部と内面の一部が褐色である他は、すべて黒色で真黒である。前述図2に比するとともろい感じのする土器である。胎土には砂粒が混入する。器厚4耗。

同図4と5は、接続はできないが同一物とみられる土器である。口唇部が円くなり、外反する土

器、内外面は黄褐色で芯部が黒色となる硬質の土器である。胎土には砂粒が混入する。器厚は5粩である。

同図6は、いわゆるくびれ平底の土器である。小片のため底径は不明である。硬質で、内外面灰白色で内面は褐色となる。

同図7は、黄褐色をした硬質のくびれ平底の土器である。胎土には砂粒の混入がみられる。底径4.7粩、底部厚7粩である。

同図8は、底部を押しつぶした格好の土器で、くびれが顯著である。内外面とも黄褐色で芯部の一部が黒色となっている。胎土には砂粒と赤褐色粒が混入する。底部厚が5粩と薄手の土器である。

#### 4. 知花遺跡

発見1960年4月、多和田真淳・金城盛雄

沖縄市知花の城畠原にある沖縄前・中期とグスク時代の貝塚や遺物包含層からなる広大な遺跡である。知花十字路西方、標高70米の琉球石灰岩丘陵上に立地する。一帯は戦後まもなく大規模な採石工事が行なわれ、遺跡が壊滅するおそれがあったため、1962年、琉球政府文化財保護委員会によって、緊急発掘が行なわれた。遺跡はA～Dの4地点からなる。A地点は4層からなり各層ともほとんど獸・魚骨や貝殻の出土しない、いわゆる中期特有の包含層で、土器には室川上層式も出土している。下層からは、面縄束洞式・嘉徳工式土器が数片出土している。発掘後も遺跡一帯は採石が続行され、現在は壊滅状態にある。発掘調査については、1978年3月沖縄県教育委員会によって報告された。今回報告するのは、A地点遺跡の採集である。

#### 土 器

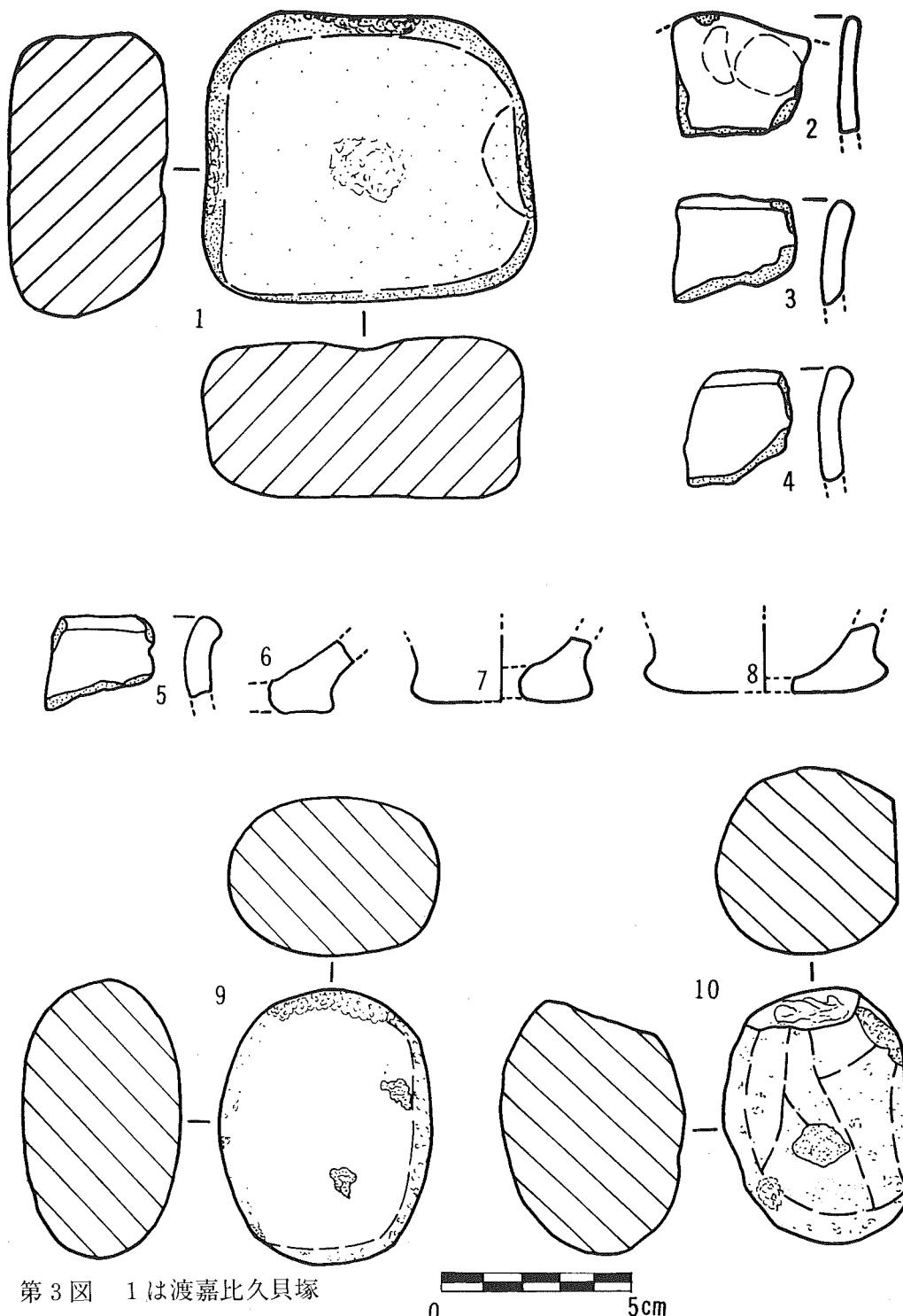
第4図4は、口縁部の破片、図の上端部に叉状工具によるとみられる2条連点文が2列施されている。器面は全面赤褐色で胎土には多量の石英粒と砂粒が混入し、手ざわりがザラつく感じである。器形等からみると荻堂式の特徴を有する。器厚は5～7粩である。

同図5は、口縁部とみられる破片、胴部との境目に相当する箇所に文様が施されている。幅4粩程の単範工具による横位の押引文があり、その上を斜沈線文で埋めている。胎土には石英と砂粒が混入する。外面は黒褐色で内面は褐色となる。器厚4粩。

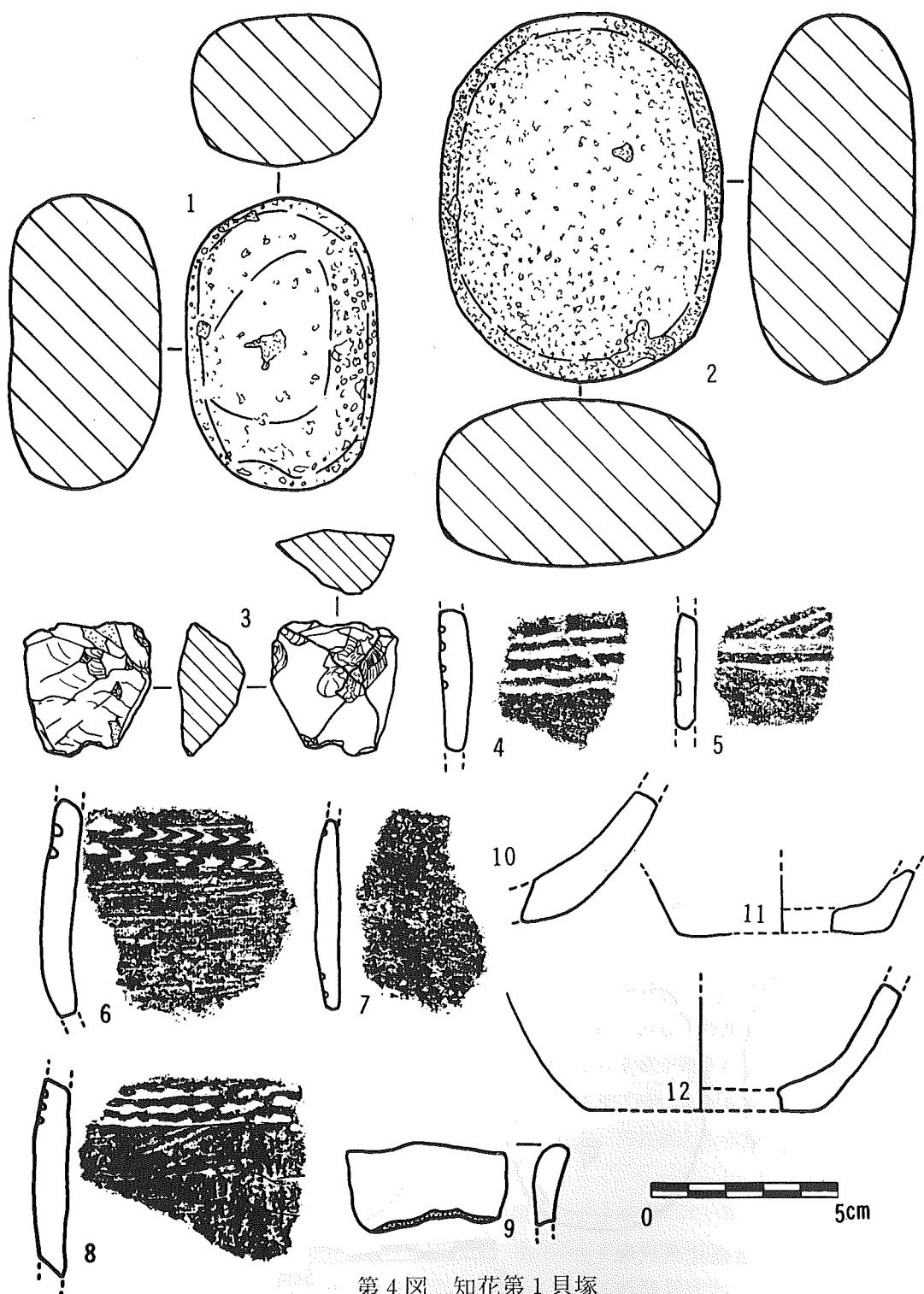
同図6は、口縁部から胴部にかけての破片である。上端部に先端の鋭利な単範工具によって、右から左へ横位の押引文が2本みられる。焼成が弱く、もろい土器である。外面赤褐色となる。胎土には多量の石英粒と砂粒を含む。外面には横位の器面調整による条痕が残されている。器厚7粩。

同図6は、口縁部の破片、現存部の上下端に先端の鋭利な叉状工具による点刻文が一列施され、その間が無文となる。施文の構成からして、伊波式とみられる。内外面とも赤褐色で、胎土には砂粒が多く混入する。器厚5粩で比較的薄手である。

同図8は、口縁部から胴部にかけての破片である。現存部の上端部には、先端の細い叉状工具によって横位の連点文が右から左方向に施されている。現存部右寄りの箇所にコーナーをなす部分があり、現状からみるとその上端が波状の口縁で、下端部にも上と同様の文様が施され、その間は無文となっている。紀要第9号<sup>注5</sup>で報告した第4図にみられる伊波式土器に類似するとみられる。外面



第3図 1は渡嘉比久貝塚  
2～8は大浜貝塚  
9、10は知花第1貝塚



第4図 知花第1貝塚

と内面は赤褐色で芯部は黒色となる。胎土には石英粒と砂粒が混入する。

同図9は、口縁が多少波状をなす無文の外傾する土器である。内外面とも褐色をなし、胎土には多量の石英粒が混入する。表面調整がはげ落ちているので手ざわりがザラついている。小片のため口径不明、器厚4耗と薄手である。

同図10は、円底とみられる破片で、全面とも表面がはげ落ちているので、手ざわりがザラついている。底部厚約1粩で胎土等の特徴からみると、同図7に類似する。

同図11は、底部から胴部への立上りが外傾する平底の土器である。内面と外面は、赤褐色となるが芯部は黒色である。胎土には石英と砂粒が混入し、焼成は悪くもろい。底径推算6.3粩、胎土混入物は同図6に類似する。

## 石 器

石器は磨石とクボミ石がある。

第3図9は、卵形をした磨石である。最大長7.1粩、最大幅4.6粩、重量224gの石質砂岩製、全面磨製。

同図10は、卵形をした磨石であるが、一面平坦に研磨が施されており、一方の頂部に敲打によるとみられる打欠痕がみられる。最大長6.7粩、最大幅4.7粩、重量207gで砂岩製である。

第4図1は、図示した面とその裏に打痕があり、凹石としての用途が考えられる。最大長7.4粩、最大幅4.5粩、厚さ4.8粩、重量275gで砂岩製。

同図2は、隋円形をした磨石である。全面丹念に研磨が施されている。最大長9.7粩、最大幅7.1粩、厚さ4.5粩、重量540g、石質角セン玢岩。

## 5.喜友名貝塚

発見 1954年5月30日 多和田真淳

喜友名貝塚は、宜野湾市字喜友名に所在する。国道58号と県道30号線の交わる伊差交差点から、県道30号線の坂道を普天間宮へ向って、約50~100米登った道路を中心に貝塚は形成されていたようである。戦後まもなく行なわれた道路工事によって、ほとんど破壊され、現在は湮滅状態にある。1954年の発見当時本貝塚の範囲は喜友名グスクにまたがって遺物が採集されたようである。遺跡は、琉球石灰岩を基盤とした標高40米の中位段丘上に立地する。1981年6月宜野湾市教育委員会による分布調査が行なわれ、県道際の民家近くまで、中期とグスク時代の遺物包含層のあることが確認されている。数点の遺物が採集され報告<sup>往6</sup>されている。

## 土 器

第5図1は、尖端が3耗前後の幅の広い叉状工具によって平行点刻文が2列施されている。現存部の口縁部右端が突起する。赤褐色で、胎土には石英粒と砂粒が混入する。胴部の器厚5耗、荻堂式土器である。

同図2は、口縁部が多少外反し、縦部には单範工具による横捺刻文が2本施されている。赤褐色で胎土には石英粒と砂粒が混入する、胴部器厚7耗。

同図3は、口縁断面が三角形をした、いわゆる宇佐浜式土器の口縁部である。口縁部に単範工具による点刻文が施されている。褐色で、胎土には多量の石英粒が混入し、手ざわりがザラつく感じである。口縁部の厚さ3耗と薄手である。

同図4は、無文の宇佐浜式土器の口縁部である。器色は褐色で胎土には多量の石英粒を含む、口縁部の器厚5耗、壺形とみられる。

同図5は、口縁部が花鉢状をなした。いわゆるカヤウチバンタ式の有文土器である。花鉢状の外面には尖端を鋭利に尖らした工具によって、点刻文が一列施されている。褐色を呈する。表面には調整痕が残る。胎土には石英粒を多く混入する。口縁部の厚5耗。

同図6は凸帯文がL状に施された口縁部とみられる破片。内外とも褐色をなし、多少硬質の土器、石英粒が混入、器厚6耗。

同図7は、底部から胴部への立上りが外傾する平底の土器。赤褐色で胎土には石英粒が混入する。底部厚1.2厘、焼成、胎土や器形などから同図1や2タイプの底部とみられる。

## 6. 魚下遺跡

識名台の北縁部魚下原台地に立地する遺跡である。多和田は魚下祝部遺跡と呼んでいた。標高85m。高宮廣衛氏によって那覇市史に報告されている。

### 土器・石器

同図9は口縁部が外反する鉢形の土器である。全面黄褐色を呈し、小量の白色物質が含まれる他は混入物は含まれず、焼成もよく堅致な土器である。口縁部と外面が範で調整されており、平口縁となっている。胴部厚さ7耗。

同図10は、口縁部先端が尖って多少内湾気味の小形鉢である。全面赤褐色をなし、胎土には白色の物質が混入する。外面には指頭の調整痕があり、内面には調整良好でスベスベした手ざわりである。胴部厚さ6耗。

同図11は、底部から胴部へかけて外傾する平底の土器、内外面とも黄褐色でアバタ状をなす。外面には、器面調整時に混入物が引きつられた痕が残っている。底部厚8耗。

同図8は、当初石斧として作成され使用されたとみられるが、現状は刃部が石斧としては使用出来ない状態まで磨り減らされている。長軸9.6厘、刃部最大幅4.2厘、重量180gで石質輝緑岩。石器の石質の同定は教育庁教育センター研究主事の大城逸朗氏にお願いした。末尾ながら感謝致します。

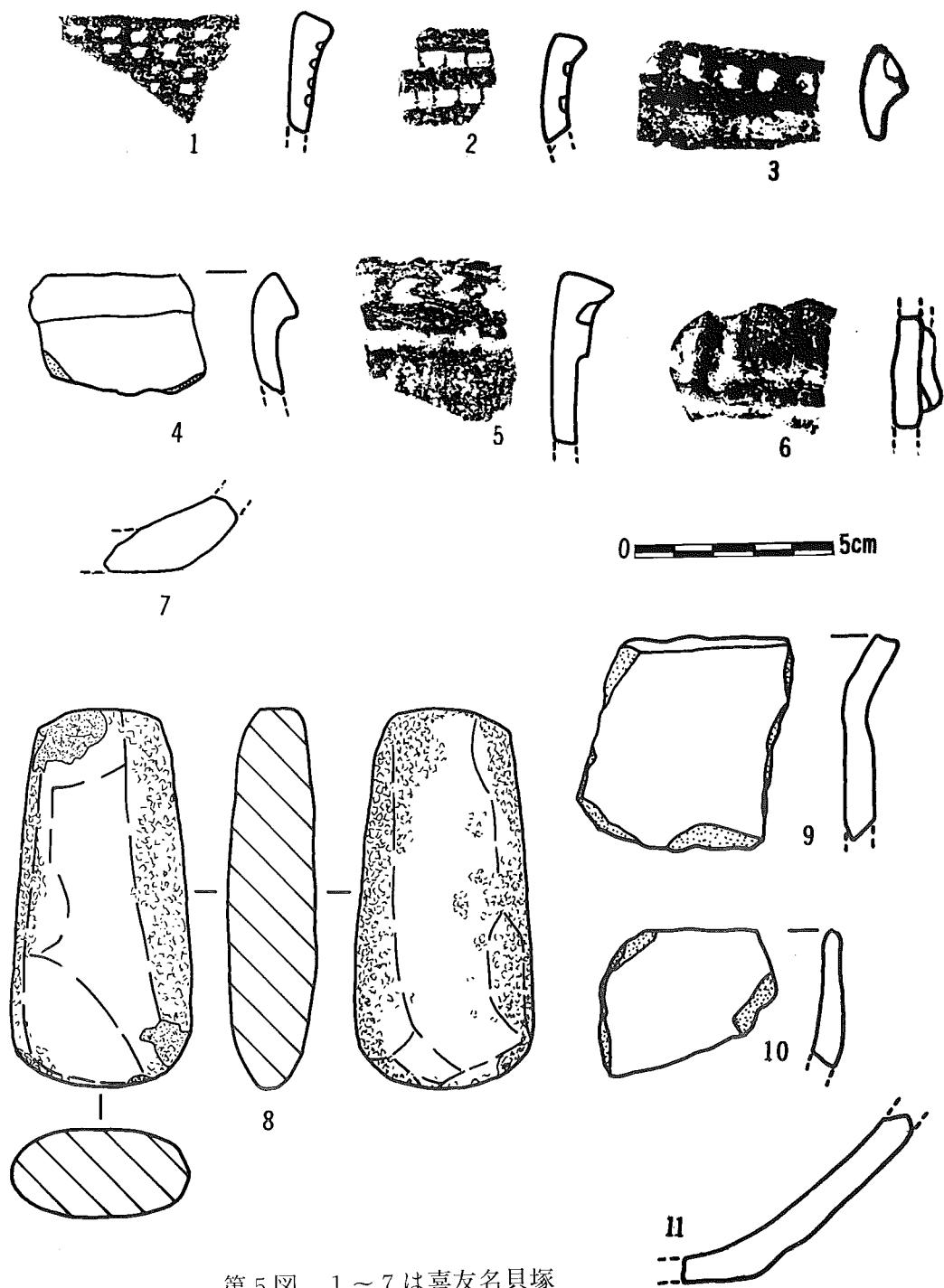
注1. 沖縄県教育委員会「沖縄県玉城村百名第二貝塚発掘調査報告書」沖縄県文化財調査報告書第38集 1981年3月

2、湧川稔・津波古幸夫「渡嘉敷島の遺跡」『郷土』第3号、1966年、沖縄大学沖縄学生文化協会

3、多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念補遺(二)」『古稀記念多和田真淳選集』古稀記念  
多和田真淳選集刊行会編

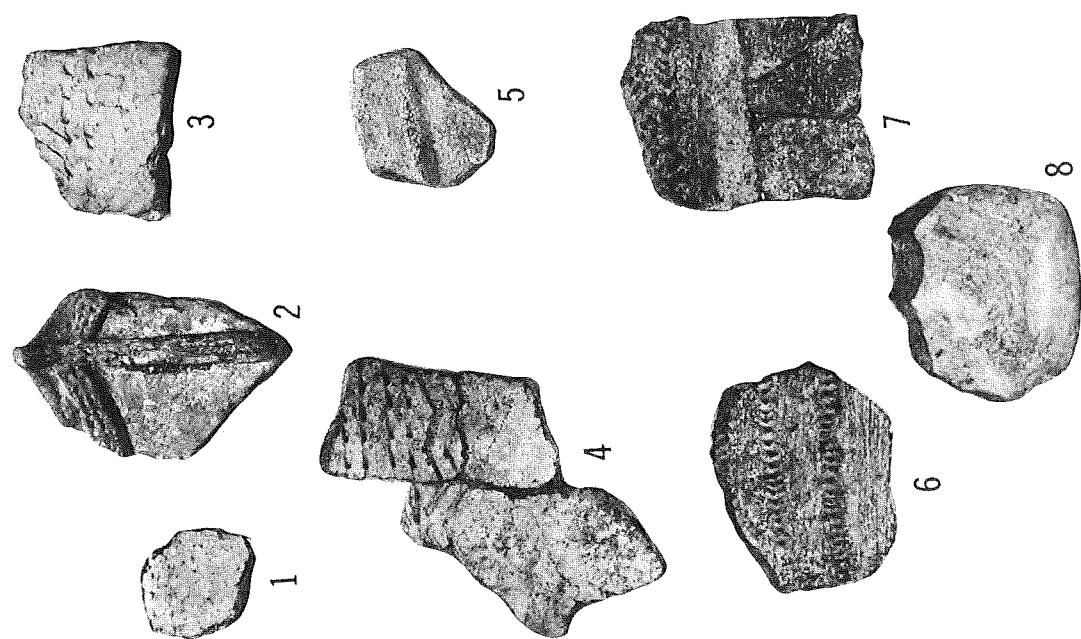
4、多和田真淳他「知花遺跡群」沖縄県文化財調査報告書第16集、1978年 沖縄県教育委員会

5、多和田真淳・知念 勇「多和田真淳調査収集の考古資料(II)」『沖縄県立博物館紀要』第9号  
1983年、沖縄県立博物館 6、注4と同じ

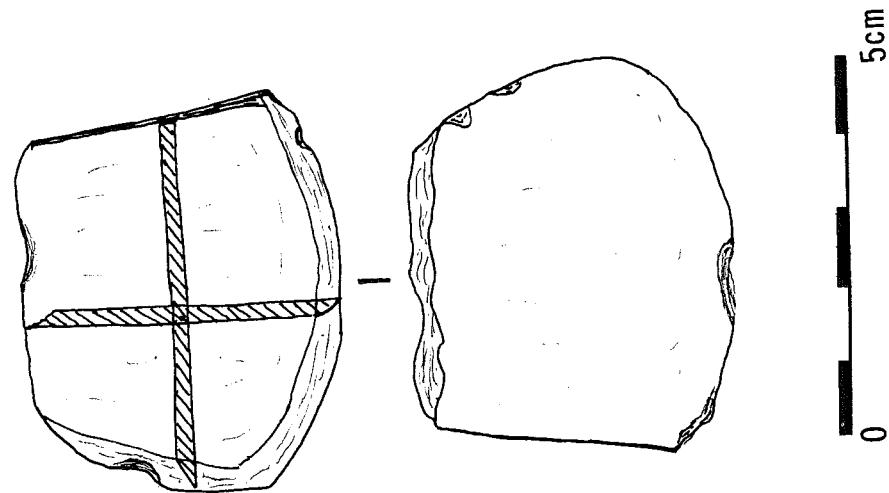


第5図 1～7は喜友名貝塚  
8～11は魚下遺跡

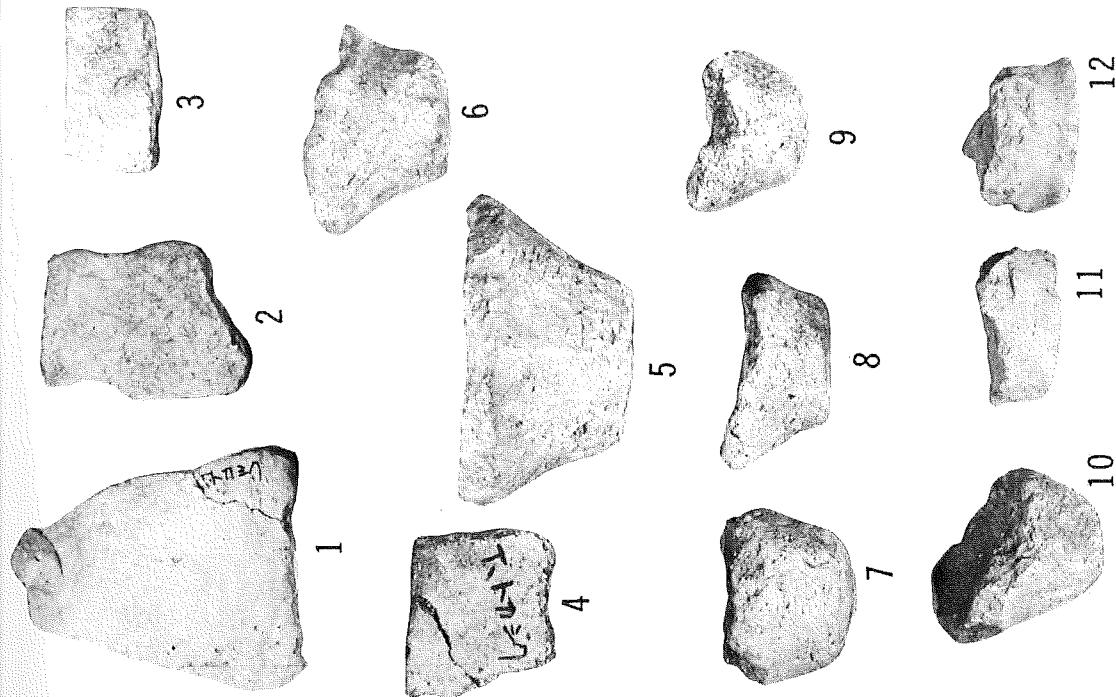
図版 1 百名貝塚



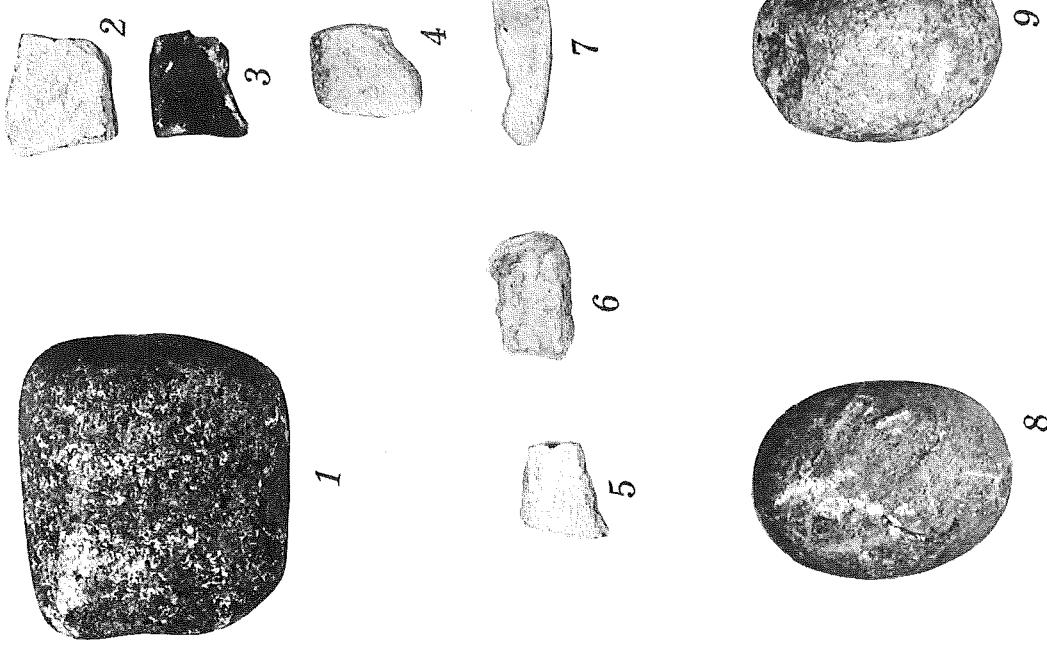
第 6 図 百名第 2 貝塚



図版1 目石貝塚

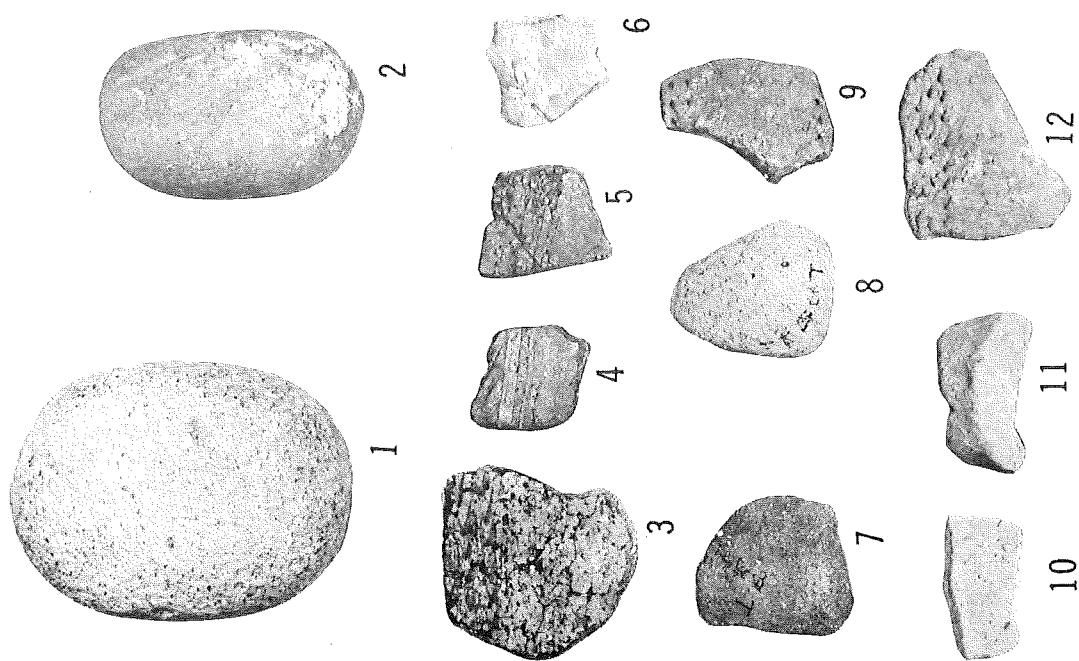


図版2 渡嘉比久貝塚



図版3 1は渡嘉比久貝塚 2～8は大浜貝塚  
9・10は知花第1貝塚

図版4 知花第1貝塚



図版5 1～7は喜友名貝塚 8～11は魚下遺跡

